

卒業論文・卒業研究の要旨

論文題目	タトゥーは後悔なのか。 -日本のタトゥー経験者にみる再選択意向と満足度の併存-
氏名	和田華蓮
メジャー	宗教学
マイナー	多文化共生
<p>本研究は、日本におけるタトゥー経験者を対象に、満足度・再選択意向（タトゥーを入れる前に戻れるならばどうするか）・他者反応との関係を手がかりとして、複雑なタトゥーについての自己意識を検討したものである。日本社会において、タトゥーは依然として否定的に語られることが多く、後悔の文脈で語られる場面も少なくない。そこで本研究は、そうした前提を問い直し、経験者自身の回答に基づいて評価の実態を明らかにすることを試みた。</p> <p>タトゥー経験者 36 名を対象とした質問紙調査の結果、現在のタトゥーに対する満足度は全体として高く、除去意向も極めて低い水準にとどまっていた。しかし注目すべき点として、現在のタトゥーに高く満足している層の中にも、「デザインや位置を修正したい」といった再選択意向を持つ者が一定数確認された。この結果は、自らのタトゥーに対する評価が単純な肯定／否定（後悔）の二分法では捉えきれないことを示している。</p> <p>そこで本研究では、この再選択意向を後悔と同一視するのではなく、現在の自己を肯定しつつ過去の選択を仮想的に再構成する調整的な再評価として位置付けた。さらに、事前の彫師との対話を重視した者ほどこの傾向が強く見られたことから、再選択意向が単なる否定的感情ではなく、施術の意思決定プロセスに対する主体的な再評価として現れている可能性が示唆された。</p> <p>以上の結果から、タトゥーに対する自己評価は固定的なものではなく、情動、社会的文脈（他者との相互作用）、時間的経過という複数の層が交差する中で動的に揺れ動く構造を持つことが明らかになった。本研究は探索的検討にとどまるものの、タトゥー経験者の心理をより多層的に理解するための一つの視点を提示するものである。</p> <p>（指導教員の推薦のコメント）本論文は、日本のタトゥー経験者を対象に質問紙調査を行い、ファーストタトゥーに対する満足度と「再選択意向」の関係を論じた意欲作である。調査により、現在のタトゥーに高く満足していても、やり直せるなら修正したいと考える層が一定数存在することが判明した。和田氏はこの心理を、単なる後悔（過去の全面否定）ではなく、自らの選択をより良く位置づけ直す調整的な再評価であると鋭く考察している。タトゥーの評価を肯定的か否定的かの単純な二分法ではなく、当事者の複雑な心理を多層的な構造として捉え直した点で極めて高く評価できる。</p> <p>タトゥーとは、不可逆的な身体変容を伴う営みである。日本のようにタトゥーに対して否定的なまなざしが向けられやすい社会において、経験者の主観的評価に真正面から着目し、実証的に整理したデータは極めて貴重である。質問項目も含め今後のわが国におけるタトゥー研究の基礎的資料となる研究である。</p>	